みだれがみ 下巻 茂木草介

みだれがみ

下巻

茂木草介

東京文芸社

みだれがみ（下巻）　三九〇円

昭和四十三年一月二十五日印刷
昭和四十三年一月三十日発行

著作者　茂木草介©
発行者　角谷奈良雄

発行所　株式会社東京文藝社
東京都新宿区払方町一
振替・東京二一七五七
電話・（三六〇）二五五〇

みだれがみ

下巻

装幀　中尾　進

題字　広津雲仙

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第一章

1

何者が著したかわからぬ「文壇照魔鏡」なる怪出版物は、その信憑性を疑われながらも、与謝野鉄幹に芳ばしくない影響をもたらした。

雑誌「明星」を創刊し、新しい和歌と詩の旗手として、その名声とみにあがっていた鉄幹は、それを妬む者たちに依って、忽ち四面楚歌の中に立たされた。

鉄幹はそんなことに屈しはしなかったが、妻菊乃との性格の相違から来る家庭の崩壊にはほどこす術がなかった。殊に菊乃との間に生れた一夫が、日毎に愛らしく生長して行くことが、わが子への愛情のきずなを断ち切れない鉄幹の想いを更に複雑にした。

或る日、居間へ入って行った鉄幹は、机の上に乗っている一通の手紙に眼をとめた。

――与謝野様みうち　きく乃様みもとに

菊乃に宛てたものである。

鉄幹は裏を返して息をつめた。

鳳しょう

差出人は堺市の鳳しょう子であった。
「菊乃！」
鉄幹は次の間へ呼んだ。
「はい」
菊乃が入って来た。顔色がすぐれないのは、胃を悪くして今日も医者へ行って来たからである。
「これ、わたしに見せるつもりでここへ置いたのかい」
鉄幹は静かに聞いた。
「いえ別に、あとでゆっくり読むつもりでしたの。いいんです、ご覧になっても」
菊乃は微笑しながら答えた。
「しかしお前に来た手紙だ、お前読みなさい」
「はい」
鉄幹が投げ出した手紙を、菊乃は素直に取りあげて、封を切った。
菊乃は鳳しょう子が鉄幹にとってどんな存在であるかを知っている。どんな気持でその手紙を読んでいるのか……鉄幹は菊乃の表情を見まもったが、菊乃はほとんど無表情で巻紙を読み終り、
「〝この後はただただひろき文をのみまゐらすべく候〟……この前この方があなたへのお手紙に書いていらしった歌を、わたくしが書いてあげたからですわ」
ひろき文とは差し障りのない一般的な便りという意味である。
「どうしてそんなことをしたんだね」
「この方の本当の気持を知りたかったんです。出来れば、わたくしがいなくなったあとのあなたのことを頼みたかったんです」

鉄幹は一瞬絶句して、菊乃を見まもった。やはり菊乃は自分と離別して、実家へ帰る決心を固めていたのである。

「わたしのことを頼みたかったって、どういう風にだい」

「わたくし実家へ帰りますけど、あとのあなたが心配なんです」

菊乃はそういって、手紙を差し出した。

「どうぞ、お読みになって……」

鉄幹は受取って、黙読して行った。

それは菊乃が出した手紙に対して、しょう子がひたすら恐縮し、許しを乞うているものであった。

うれしく候。み情うれしく候。君すゐし給へ。みだり心のあるに候。やさしの姉君はそをすゐし給ふべく、かかるかなしきことになりて、きこえかはしまゐらすちぎりとはおもはず候ひし。人並ならぬつたなき手もつ子、それひたすらはずかしとおもひながら、いつかはのどかにかきかはしまゐらすことゆるし給ふ世あるべし。おのれが奇嬌を売らむとてのうた、その為に師なる君にまであらぬまがつみかけまゐらせしこの子、にくくこらし給ひぬがくるしく候。この後はただひろき文をのみまゐらすべく候。ゆるさせ給ふべくや。つみの子この子かなしく候。御なつかしく候。やさしのみ文、涙せきあへず候ひし。けふまことそぞろがきゆるし給へ。何も何もゆるし給へ。御返しまで候ひし。姉君のみ前に。

鉄幹が読み終ったのを見て、菊乃は言葉を継いだ。

「わたくしたち、お別れはしますけど……」

鉄幹はキッと菊乃を見すえたが、それにはかまわず、
「でも別に大喧嘩をした訳でもございませんでしょう。ただ、だんだん考え方のちがいが目に立って来る。しかもちがっているところを……お互いに……一生懸命、努めれば努めるほど、余計に……だからわたくし、それはもう仕方のないことだと思います。だけど……だから……あとのことはどうなってもいいというような、身勝手なことはしたくないんです」
鉄幹は手紙を読み返すふりをしていた。
「あなたってお小さい時から、苦労をしていらっしゃるから、ご自分では何でも出来ると思っていらっしゃるんです。でも、たまに洗濯でもなさったら、シャボンは沢山お使いになるけれども、垢はちっとも落ちていません。食べる物をお作りになってもそうでしょう。やっぱり、しっかりとした介添えがいないと駄目なんです」
鉄幹はしょう子の手紙を、終りまで二度読んだ。
「聞いていらっしゃいますか」
「うん」
菊乃はちょっと間を置いてきいた。
「家移りはあてはあるんですか」
「文壇照魔鏡」の影響で、近所の人々にも通りがかりの連中にも、有形無形の迫害が加えられるので、鉄幹はどこかへ引越そうと考えているのであった。
「あるようなないような、とにかく此処は騒々しくなって来たからね」
「そうでしょうが、此処はお家賃も高くないし、いいと思うんです」
麹町上六番町——菊乃が人妻となってはじめての住居なのである。

「お前、いつ発つんだね」
鉄幹は感情を抑えながらきいた。
「わたくしの方はいつでもいいんです」
「一夫のことだがね」
「はい」
菊乃は眼を伏せた。
「今はお前のおとう様がつれて来いとおっしゃるからその通りにするんだけど、くわしいことはあとで相談したいんだ」
「父は家の後継ぎにしたいんです」
「そうだろうね、それも一夫にとっては倖せかも知れないな。けどわたしはまだ、この子のためにはどうしてやったらいいのか、はっきりと心が決まらないんだよ」
菊乃は微かにうなずいた。
鉄幹はゆっくりと巻紙を巻きながら、
「お前、この人のことをどう思うね」
「しょう子さんですか……」
菊乃は鉄幹の眼の奥を見るようにして、
「いい方だと思います」
何の感情も混えない声であった。

2

堺市の年中行事の中に、大鳥神社の花摘みの神事というのがある。四月十三日である。

この行事は明治十六年五月からはじまったもので、桜、椿、たんぽぽ、菜種など春の花々を盛った花籠を持った花摘女と、稚児に扮した者とが、神輿について浜寺公園内の行宮に献花の式を行い、夜になると、市中を練り歩くのである。

その夜、行列は和泉堂の前を練り歩いて行ったが、しょう子はそんな賑いをよそに、自分の部屋に閉じこもっていた。

尤もしょう子一人ではなく、モモ枝を傍に置いて、その手に持たせた糸を糸巻に巻いていたのである。さっきから男物の浴衣を縫っていたのだが、糸が足りなくなったらしい。

「誰や来ました！」

モモ枝がうろたえて口走った。

しょう子は素早く縫いかけの浴衣を後へ隠した。

「しょうとはん、おいでだすか」

障子の外から声をかけたのはお福であった。

「へえ、おいでだす」

モモ枝が答えた。

お福は障子をあけて、

「ごりょんさんが行列きれいやさかいとおっしゃってでおますけど、早よ来やはりまへんと……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しょう子を呼びに来たらしい。
「わかってますがな」
モモ枝が代って答えた。
お福は何かを感じたらしく、モモ枝をジロリとにらんで障子を閉めた。
モモ枝はお福の去って行く足音を聞きすましてから小声にいった。
「男もんの浴衣みつけられたらえらいことでおましたな」
「けど、東京のにいちゃんに送ったげるのとおんなじ柄を二枚縫うてますのやさかい、見られたかてかめへん」
一枚は鉄幹の浴衣であった。
しょう子が鉄幹のために、みずから縫った浴衣を送る気になったのは、菊乃に去られた孤独を訴える手紙を受取ったためである。

寂しく候、わが如き者は地の果シベリヤの野に行きて死ぬべきに候、その人とはまたあわんことあるべしといひて別れ候、寂しく候。

鉄幹の遣瀬ない孤独はしょう子の胸に沁みた。
「ほな、なんで隠しやはりますねン」
モモ枝がそういった時、いきなり障子があいた。
「ねえちゃん、えらいこっちゃ」
修二郎であった。

「なんだすねン」
しょう子はたしなめるようにきいた。
「新聞記者の江口さんや」
「え？　あのお方がどないしやはりましてん」
江口は両親にすすめられたままになっている求婚者である。その職業が新聞記者だということで、しょう子の心はいくらか動いたが、それは鉄幹と会う前のことであった。
「今うちへ入って来たはりますねンで」
修二郎はさも重大事件そうに告げる。
「何んでだす」
「行列と一緒に歩いたはったらしいわ、それを市会議員の北村はんが見つけて、うちへつれて来やはったらしい」
「おとうさんは？」
「おとうさんは大鳥神社へ詰めたはりますがな」
「ほな、おかアさんがお相手したはりますのンか」
「そうだす」
修二郎がそう答えた時、階下から甲高くモモ枝を呼ぶお福の声がした。
「えらいこっちゃ、お客さんのお茶だすわ」
モモ枝はあわてて階下へ下りて行った。
「いまにねえちゃん呼ばれまっせ」
しょう子の気持を知っている修二郎が、声をひそめていった。

「どないしょう」
「つまり不意討ちの見合という訳だすわな。肝心の江口さんは迷惑そうな顔したはったけど、北村はんがえらい張切ったはりますねン、ええがなええがな、まかしときなはれいうてな、自分の家みたいに奥へ入って行きゃはるさかい……」
修二郎がいい終らないうち、階下からモモ枝の声が、
「ぼんぼん、ごりょんさんがお呼びでおまっせ……」
「よっしゃ、今行きます」
修二郎は答えて、
「逃げなはれ」
と、しょう子をせき立てた。
「二丁目の本屋へでも行きなはったらどうだす。お客さんのこと知らんかったさかいお勝手から出て行ったというたら言訳が立ちますやないか」

「今日な、市役所の用があって行ったら、議員さんの北村はんに会うてしもた……」
父の宗伍がしょう子の部屋をのぞいていった。
しょう子は今まで茶の間で食事をしていたのだが、宗伍が外出からもどった気配に、いそいで二階へあがって来たばかりであった。
「先月の十三日、あの時の返事はどうだすといわれて、わては返事に困ってしもた」

新聞記者の江口の話である。北村を通じてしょう子に非公式ながら求婚していた江口が、はじめて家へ訪れた時、しょう子は逃げそこなって挨拶だけしていた。
「そらお見合でもなんでもないねンさかい、へへへと笑ろてしもたらそいでことは終いや。けど、あの御仁が相手ではそうそうとぼけてもいられへん、そうだっしゃろ。あんたな、あの晩江口さんの前へ出てお辞儀しなはったンやろ」
しょう子は仕方なしにうなずいた。
「そいでどうだすねン。江口さんというお方、どない思いなはったンや」
「……」
「年頃もええ、頭もええし男前もええ。とわては思うのやけど、あんたはどうだす？」
「ええお方だした」
「そいで？　それから先は？」
しょう子は首を振った。
宗伍は苛立って来たらしく、吸っていた煙草を手あぶりの灰に突き刺した。
「あんたな、東京の鉄幹さんとやっぱり手紙のやり取りしてなはんのか」
「へえ」
「へえて……そんなこと……それはいかんといいましたやないか」
「けど……」
「けど、なんだすねン」
しょう子は追いつめられて、もうこれまでとすわりなおし、宗伍を正視した。
「おとうさん……」

「へえ」
宗伍はしょう子の気魄のようなものに圧されたらしく、一瞬たじろいだ。
「わては今年二十四だす。お嫁入りの時期はとうにおくれてしまいましたけれどそのかわり……そのかわりというたらおかしょますけど、世間のことひとさんのこと、男はんのことも、ちょっとはわかるようになったンとちがいますやろか」
「あんた、わてにそむきなはンのか」
宗伍は威厳を支えようとして、しょう子の言葉を撥ね返した。
「いいえそむくつもりはちょっともあれしまへん。けど、ただ黙っておとうさんのいいなりになる、人形みたいに、そのつもりもあれしまへん」
「あんたのいうてること、それがそむくということとちがいますのンか」
「いいえちがいます」
しょう子は強くいい切ると、宗伍はこみあげて来た感情を抑えるのに苦労した。
「あのな、あんた今わてに何をいいたがってンのか知らんけど、あんまりつきつめたこと口に出してしもたら、それこそ取り返しがつきまへんのやで。よう考えて、考えた上にもよう考えて、それから口に出しなはれ。なんぼ意見がちがうというたかて、わてとあんたは親子や。仇同志やあれへん。血を分けた実の親子や、わかってますやろ」
「わかってます」
しょう子が素直にうなずいたので、宗伍は微笑する余裕を取りもどした。
「あんたはちいちゃい時からヤンチャな子でな、後からわての頭の毛握って背中へかきのぼったり、わてのお腹の上でわざと尻餅ついたり、そらえらい悪戯な子やった。おぼえてなはるか」

そんな風に話を持って来られると、しょう子は弱かった。
「おとうさん……」
「へえ」
「三日待っとくなはれ」
しょう子は手を突いた。
「三日いうと、しあさって……」
「へえ、よう考えてお返事しまっさかい」
「よっしゃ。ほなあんたのいう通り三日待ちまひょ。そのかわり、それがギリギリの返事だっせ」
宗伍は釘を刺した。
「へえ、ギリギリのお返事でおます」
しょう子はいよいよ自分で自分の運命を決定しなければならないドタン場に立たされたのを感じた。

約束の三日が経っても、しょう子の心は決まらなかった。というより、鉄幹への思慕のたかまるにまかせる今となっては、江口との縁談を一寸延ばしに延ばすより方法がないのであった。
その夜急に急用で四国へ発つことになった宗伍は、しょう子に即答を迫った。
「返事どうだすねん。今夜返事を聞かなんだらまた有耶無耶になってしまうさかい。どうだす、江口さんとこへ嫁入りしなはるか」
しょう子はせっぱつまって、
「あの、もう一ぺんお見合してから」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com